

芭蕉の句碑

俳諧の広まり

匠 探訪

—41—

「名月や池をめぐりて夜もすがら」。

俳人・松尾芭蕉が46歳の時、1686年（貞享3年）「十五夜」の句会で詠んだものとされています。

この句碑が内山（豊和地区）妙廣寺境内にあります。芭蕉の151回忌にあたる1844年（天保15年）に同村の飯田左内らこの地域の俳人10人によって建てられました。

市内にはこの碑をはじめ江戸時代のもの5基を含め、13基の芭蕉句碑が見つかります。



妙廣寺境内にある芭蕉の句碑
（豊和地区内山）

妙廣寺の句碑が建てられた翌年（1845年・弘化2年）3月に記念句集『月見塚集』がまとめられました。この句集には全国の俳人から寄せられた605句がおさめられ、市域の15か村・55人の名も見られます。内山村は9人で最も多く、飯高村7人、平木村

5人、椿村5人と続きます。しかし、句碑や句集には村名と俳号が記されているだけで、人物の特定や経歴を知る手がかりにはなりにくいといえます。

富裕層の農民の間で俳諧が急速に広まった要因として、江戸の宗匠（そうしょう）俳諧の師匠）が各地に行脚（あんぎゃ）し門下を拡大していったことで地方的な宗匠も生まれたことがあげられます。その宗匠のもとにグループ（連）が結成され、地域的な広がりをみせました。芭蕉の句碑建立に尽くした内山村の飯田左内も宗匠的な存在だったのでしょうか。

飯田の前に宗匠であったとされる安久山（飯高地区）の木下兼治が中心で建てたとみられる句碑は、1800年ごろのものとしてあります。このときにも記念句集『揺松（ゆるぎまつ）集』が出版されました。

こうした句碑や句集により江戸時代後期には、この地域でも庶民の間で俳諧がかなり広まっていたことが知られます。

問 八日市場図書館 ☎ 73・3746